

れば数字はついてくるのです。3億弱だった売上が7億に、寸志2万円だった賞与が一般企業並みにさせるようになり、関西だけでなく名古屋・東京と商圏を広げ受注は右肩上がりに伸びていきました。そして、これでもうちも大丈夫や!と思っていたころにまさかが起きました。社員からの不満が爆発したのです。

その時から父の言葉の聞こえ方が変わりました

「また残業させるのか?」「どこまで働かせる気だ?」「殺す気か?」。必死になつて仕事を取ってくる私は、社員が疲弊していたことにまったく気づきませんでした。ヒマすぎて餅を焼いていた状態から、今度は逆に忙しすぎる状態への急激な変化。最後には「仕事を取つてくれるのは息子やからや。そもそも社長の息子やから数字を残して当たり前や」とまで言われる。わたしの頭の中でなにかが壊れたのが分かりました。岸家のアトツギなのだから一般社員の何倍も努力して当たり前だと自覚し全速力で走ってきたのにその程度にしかなわっていないとは…。とどめをさしたのが父。70歳での引退を決めていた父が「あと3年で社長をやれ」と言ってきたのです。当時の私は会社の売上の半分以上を1人で作り、いそがしいときには現場に行き、図面を描き、時には自分で加工もしていましたので、ほぼ休みがない状況。そんなわたしに経営までさせようとするなんて、父は本当に何もわかっていない。社員からの不満、父からの無理強い、たびたび言いあう父と私、会社の雰囲気はどんどん悪くなっていました。

転機がきたのが2021年9月。ある

勉強会に参加したときのことです。3日間にわたるコースのなかで、私は父への不満をしゃべり続けました。「やりたいことを邪魔する」「今しか見ない」「外を見ろという自分を否定する」。ところがコースのコーディネーターのアドバイスから父の言葉は「ブレーキ」ではなく「愛」だったのではとふと感じる瞬間があつたのです。全力で走る息子がクラッシュしないよう、足元を見ろと伝える父の姿。その時から父の言葉の聞こえ方が変わりました。反対ではない、止めてもいい、より良い走り方を、一緒に考えてくれていただけ。そしてもう一つは社員への想い。それまでの私は「俺しかできない、俺がこの客を繋ぎ、売上を作っている」と傲慢になり社員のことを小さくみていた。こいつはまだまだあかと決めつけ、成長の可能性を潰していたのは自分自身だったことに気がつきました。そして父への接しかたが変わると会議が変わりました。わたしが語り父が指摘する。「甘い」「足元を固めろ」と言われたとき、苛立ちの代わりに「なるほど」と返せる自分になりました。それを見た浜口がビックリしていました。「どないしたん?怖いんやけど」。まずは素直に耳を聴けることがチームを強くする。社員への向き合い方も同じでした。「俺が一番」「俺しかできない」と思い、むほど人の欠点ばかりが目がいくもの、任せられない理由はいくらでも見つかりますがそうではなく何かあれば自分がフォローすればいい。そう腹を決め担当顧客を渡しました。小さなズレはある、けれど任せることでしか人は育たない。そして2022年2月に代表取締役就任しました。

経営者の仕事は何か?わたしの答えはひとつです。「未来をつくること」。もっと正確に言えば「携わる人がワクワクする未来をつくること」。いま誰よりもわたし自

身がワクワクしています。それは「つながり」を感じるから。以前の弊社求人サイトは条件ばかりでしたが、いま前面に出しているのは「人」。企業説明会では事業説明より先に1分間のスライドで「働く人の笑顔」を流しました。浜口が壇上で語つたのは、仕事内容ではなく仕事の楽しさ。大企業が並ぶ会場で、わたしたちのブースにもっとも多くの人が集まりました。志望理由は「アットホームに働けそう」「人が良さそう」。待遇の羅列では心は動かない。現場の小さな誇りを出す。装う広報ではなく、ありのままの岸産業を見せる。会社は製品の集合ではない。人の集合であり物語の集合なのです。

父が傘寿を迎えた日、家族で記念写真を撮りました。会食の席で、父は涙ながらに会社への想いを語り、孫のコウタロウにふりました。「わかてるか?」。コウタロウは答えました。「ジーン、わかてるで」。後日、彼は「志望宣言書」を書いて見せてくれました。4代目がどうなるかは白紙です。無理に継がせる気はない。ただ歩むための道を真っ直ぐに敷いておくのがわたしの責任。岸家の家訓があるとすれば「諦めた時が失敗」。やめる理由はいつでも作れる。続ける理由をいつも自分に問うのです。私の人生が映画だとしたらちょうどいま半分は終わつたくらい。エンディングは決めています。従業員もその家族も取引先も「岸産業と関わつてよかった」と心から感じてもらうこと。売上は10億になりましたがこの数字は結果であり扉はあくまで手段です。わたしたちがつくっているのは冷気を逃がさない壁ではない。人を傷つけない境界でもない。人と人、企業と地域、現在と未来をつなぐ「人口」。扉が開くたび誰かの仕事が始まり誰かの暮らしが守られる。その一枚一枚に、祖父と父の背中、仲間の汗、お客様の信頼、そして未来へのワクワクを描いていく。扉から未来を開く。岸晃広の人生の時間をそのために使っていきます。

from IL SARTO

「創造・貢献・笑顔」

「創造・貢献・笑顔」のシンボル。これこそが岸社長の装いテーマ。岸産業様のブランドキーワードである「絶対的安心感・安全・信頼性・希望」を感じさせるブルーを基調カラーに、岸社長の大事にされている「寄り添う」というメッセージを伝えるブラウンネクタイで、経営理念を身に纏って頂きました!



- 6.丁寧に工場内を案内してくれる岸社長
- 7.社内が美しいのでどこで写真撮影してサマになるのです!

経営者の仕事は何か?
わたしの答えはひとつ。
「未来をつくること」